

平成 22 年 4 月 30 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
 研究期間：2008～2009
 課題番号：20830043
 研究課題名（和文） 存在論に立脚した教育学の可能性と限界——ボルノウ教育学の再考を軸に——
 研究課題名（英文） The Possibility and Limits of Education Based on Ontology: Reconsidering Anthropologic Pedagogy by Bollnow
 研究代表者
 井谷 信彦 (ITANI NOBUHIKO)
 京都大学・大学院教育学研究科・JSPS 助教
 研究者番号：10508427

研究成果の概要（和文）：従来の教育／教育学は、人間を取り巻くあらゆる現象を、成長発達に役に立つ手段となるか否かを基準として評価してきた。この結果現代社会は、諸々の事物だけでなく人間自身も役に立つか否かを基準として評価されるという、有用性と価値の桎梏に囚われた社会となっている。しかし、教育を含めた人間の生の営みは、このように有用性や価値に還元することのできない別な位相を含んでいる。有用性や価値の桎梏に囚われることのない、教育を含めた人間の生の「奥行き」を探求し、この「奥行き」に相応しい知の在り方を明らかにした点に、本研究の最も重要な成果がある。

研究成果の概要（英文）：Traditional practices and theories of education tend to evaluate all phenomena in terms of its usefulness for human development. As a result, in modern society, not only whole entities but also human beings are considered to be useful or useless standing-reserve. But we know that human life including education cannot be reduced to its utility and value. This research explored the depth of human life including education that cannot be captured in the frame of utility and value, and disclosed the possibility of learning and teaching of the depth itself.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	570,000	171,000	741,000
2009 年度	580,000	174,000	754,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,150,000	345,000	1,495,000

研究分野：教育人間学・臨床教育学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育哲学、ボルノウ、ハイデガー、人間学、存在論、ニヒリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、数年来有用性の原理を越えた人間の生の可能性を探求し続けている、日本の教育学者矢野智司の研究がある。直線的な成長発達理念に支配された従来の教育観と、それに基づく世界観・人間観の一面性を指摘する矢野は、「遊び」や「贈与」など「役に立つか否か」という基準を逸脱する生の営みへと注意を促している。学習塾や予備校の躍進に伴い公教育の有効性に疑問が差し挟まれ、教育のサービス業化が進展する現代にあって、矢野の研究は極めて重要な問題提起を含んでいると云える。しかし、矢野も自覚しているように、そうした人間学的洞察を教育学へと応用することは独特の困難を孕んでいる。その困難の所在と原因を明らかにし、それを克服する方途を提示することが本研究の課題である。

有用性の原理を越えた教育観に関する研究が抱える困難とは何か。それが端的に露呈しているのがボルノウの教育理論である。筆者はこれまで、従来自明なものと看做されてきたボルノウ教育学とハイデガー哲学との関係を改めて問い直すことで、存在論を無視したボルノウの理論が深刻な問題を抱えたものであることを明らかにしてきた。端的に云うならそれは、「有用性の原理に基づく秩序による排除と再包摂」という問題である。危機や出会いなど偶然性に満ちた契機の重要性を明らかにし、人間の打算や計略の限界を指摘するボルノウの理論は、その発端においては、有用性の原理に囚われた教育観を越えて行こうとする意図を有するものであったと云える。しかしその理論は結論において、ボルノウ自身の意図をすら裏切るような仕方、再び有用性の原理に絡め取られてしまう。危機や出会いは人間の成長発達のために役に立つ契機であると看做され、そのように看做されることで、有用性の原理を越えた生の可能性は閉塞され覆い隠されてしまうのである。このように、有用性の原理を越えた教育観についての研究は、一度は有用性の原理による支配を免れた人間の生と教育の可能性を明らかにしていながら、最後には再び有用性の原理に絡め取られてしまう危険性を孕んでいる。本研究は、ここに述べたような筆者のこれまでの研究成果を発展させ、ボルノウ教育学に孕まれた問題をさらに明確にすると同時に、その克服のための方途を提示しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、有用性の原理に囚われた伝統的

な教育観の問題点を明らかにすると同時に、それを克服する方途を提示することを目的とする。ここで云う「有用性の原理」とは、身の回りの事物や人間の営為を「役に立つか否か」という基準に則して評価する価値判断の原理のことである。上掲の目的を達成するため本研究では、現代ドイツを代表する教育学者ボルノウの思想を詳細に検討し直すことで、従来の教育哲学研究とは異なる視座から、改めてその意義と問題点を問い直すことが試みられる。本研究に独自のその視座を与えてくれるのは、同じドイツの哲学者ハイデガーの存在論である。これまで多くの場合に自明視されてきたボルノウとハイデガーとの思想的な関係を改めて精査することで、有用性の原理に囚われた教育観が現代社会にまで通じる深刻な問題を孕んだものであることが明らかになると共に、その問題を克服するための方途を提示することもまた可能になるに違いない。

この目的を達成するため、本研究では次に挙げる三点の課題に携わる。

(1) 筆者はこれまで、ボルノウ教育学の中心概念の問い直しを試みてきた。その総括として本研究では、ボルノウの理論の核心を占める「新しい庇護性」に関する理論を精査し、その意義と問題点を解明することを試みる。これにより、上に述べた有用性の原理による支配という問題が、ボルノウ教育学の全体を支配する深刻な問題であることが明らかになるだろう。

(2) 有用性の原理に囚われた教育観の問題について考察するとき、教育学研究の分野におけるハイデガー哲学の受容を無視することはできない。日本の教育学者和田修二やドイツの教育学者バラウフによる研究がその草分けである。さらにまた近年ではイギリスの教育学者スタンディッシュやアメリカの哲学者トムソンらの論稿に見られるように、英語圏の教育学研究においても、有用性の原理に囚われた教育観の克服が、重要な課題として論じられている。だが、ハイデガー哲学に依拠する教育理論は、これまで多くの場合、相互に参照し合うことなく独立して研究を進めてきた。そのため、有用性の原理に囚われた教育観に対抗する理論研究は、十分に蓄積されず停滞しているのが現状である。それゆえ本研究では、これらの先行研究を相互に関連付けることで、存在論に依拠した従来の教育学研究の意義と問題点を明らかにし、有用性の原理を越えた教育理論を構築するための端緒を築くことを試みる。

(3)最後に本研究は、筆者のこれまでの研究成果と(1)及び(2)に提示した研究を統合し、有用性の原理に囚われた教育観を克服する方途に関する研究に着手する。ボルノウ教育学の問い直しに基づき、ハイデガーの存在論に立脚しながら、有用性の原理による支配を越えた教育及び教育学の可能性を明らかにすることが、本研究の最終的な課題である。

3. 研究の方法

本研究は京都大学における教育人間学の伝統を継承しながら、臨床教育学という比較的新しい分野の方法論をも取り入れて独自の方法論を形成する。教育人間学は、人間の生に関わる多様な現象についての探求に基づいて、教育の可能性と限界を改めて問い直そうとする。それに対して臨床教育学は、基盤となる理論は多種多彩であるとしても、そうした理論が人間の生や教育実践と接触するその現場で、教師や子どもに何が生じるのかを見定めようとする。「有用性の原理に基づく秩序による排除と再包摂」という問題は、まさに「人間学的な教育学」を標榜するボルノウの理論が人間の生の現実と接触する現場において生じてくる問題であるため、教育人間学と臨床教育学という異なる二つの分野の有する視座が不可欠なのである。

とはいえそれは、本研究がもっぱら教育実践の事例検討に携わることを必ずしも意味しない。むしろ、そうした教育実践や事例検討の基礎をなす教育観・教育理論を問い直すことが、本研究の中心的な課題である。具体的には、本研究は、文献研究を中心として進められることになる。ボルノウ教育学とハイデガー哲学との関係を問い直し、ボルノウの理論における問題点を明らかにするためには、両者の文献を丁寧に読み直すことが必要不可欠である。またそれと並行して、ボルノウやハイデガーの思想に依拠した既存の教育学研究を紐解くことも重要である。こうした作業を通して、従来の教育学研究が見落としてきたボルノウ教育学の問題点とは何だったのか、なぜその問題は看過されてきたのか、ハイデガーの存在論は教育学においてどのように受容され応用されてきたのか、といったことが明らかになるだろう。それにより、「有用性の原理に基づく秩序による排除と再包摂」という問題の所在が解明されると同時に、それを克服するための方途についても重要な示唆を得ることが出来るに違いない。

4. 研究成果

(1)平成20年度

平成20年度の研究成果は、主に以下の二に集約できる。①ボルノウ教育学の中心概念である「新しい庇護性」を、ハイデガー哲学

との関係の許で問い直すことで、その意義と問題点を明らかにした点、及び②ハイデガーの存在論に依拠した既存の教育学研究を比較検討することで、同じくその意義と問題点を明らかにした点である。

①に関しては、有用性の原理に囚われた教育観の問題が、ボルノウ教育学の全体に関わる深刻な問題であること、ボルノウが等閑視してきたハイデガーの存在論に、その問題を克服する可能性が垣間見られること、という二つの点が明らかにされた点に、その意義を認めることができる。②に関しては、有用性の原理に囚われた世界観・人間観・教育観の克服こそが、存在論に立脚した教育理論に共通の課題であったこと、ところが既存の教育理論は存在論の射程を矮小化しており、結局はそれ自体も有用性の原理に絡め取られていること、という二つの点が明らかにされた点に、その意義を認めることができる。

これらの二つの研究成果からは、さらに、有用性に囚われた教育観は、現代社会の諸問題にまで通じる根深い問題であること、しかし有用性の原理はそれを克服しようとする企図それ自体をも絡め取る構造を持っていること、という帰結が導かれた。これらの帰結は、有用性の原理に囚われた教育観を克服するためには、伝統的な教育学とは異なる思考の枠組みが要請される、ということを示唆している点で重要である。

(2)平成21年度

以上の成果を受けて、計画最終年度である平成21年度には、ハイデガーの存在論に立脚しながら、有用性や価値の桎梏に囚われることのない教育／教育学の在り方を探求することが試みられた。これにより、教育／教育学は、人間の主体性を基軸とする有用性や価値に依拠した次元と、その有用性や価値の枠組みを抜け去った次元という、二つの次元の緊張関係のなかで捉え返された。当該年度の研究成果は、以下の二点に集約することができる。①人間の生と世界の二重性に即した知識／伝達の在り方を明らかにした点、及び②この知識／伝達の在り方から導かれる教育学の研究方法を提示した点である。

①に関して、「存在の真理」に関わるハイデガーの論考から導きだされたのは、学び知ることを差し控えることによって学び知る「予感」と、教え伝えることを差し控えることによって教え伝える「合図」という、風変わりな知識／伝達の在り方である。客観性・確実性を重要視してきた形而上学の伝統が、現代のニヒリズムの根底にあることを明らかにすると同時に、人間の生と世界の二重性に関わる予感／合図という新たな知の在り方を提起したところに、本研究の第一の成果・意義がある。②に関して、予感／合図と

しての知識／伝達の在り方に関する洞察は、形而上学の伝統に基づいた従来の教育学の研究方法を問い直すことを許してくれる。ボルノウが生への成熟の機会として提示した「危機」「出会い」「覚醒」などの出来事を出来事として探求するには、予感／合図としての知識／伝達の在り方を教育学に取り入れることが求められる。このことを明らかにした点に、本研究の第二の成果・意義がある。

知識の伝達こそが教育の中心課題であるという考え方に一定の権利を認めるとすれば、以上のように人間の生と世界の二重性のほうから学び知ること／教え伝えることの在り方を捉え直した本研究は、従来の教育／教育学の根幹を問い直すことによって両者を改めて活性化しようとする、極めて重要な探求であったといえることができる

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

①井谷信彦 (2009) 「存在論に立脚した教育理論の展開：『有用化としての教育』に対する問いかけを軸に」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第 55 号 (査読有)

②井谷信彦 (2008) 「『住まうこと』と世界の奥行き：O. F. ボルノウ『新しい庇護性』再考」『教育哲学研究』第 98 号 (査読有)

[学会発表] (計 3 件)

①井谷信彦・宮崎康子・平石晃樹 (2009) 「主体性の超克は現か夢か：「不眠症」の時代の教育思想」教育思想史学会第19回大会コロキウム 於大阪大学

②Itani, Nobuhiko (2009) The Aporia of the Other in Curriculum Construction: A Response to Anna Strhan, oral presented in International colloquium between Institute of education, London University and Graduate school of Education, Kyoto University, at Kyodai-kaikan

③井谷信彦 (2008) 「住まうこと」と世界の奥行き：O. F. ボルノウ『新しい庇護性』再考」教育哲学会第 51 回大会一般研究発表 於慶応義塾大学

[図書] (計 1 件)

①桑原知子・矢野智司編 (印刷中) 『臨床の知：心理臨床学と教育人間学からの問い』創

元社所収 井谷信彦「宙吊りにされた『知』の形式：危機に関わる『知』としての『臨床の知』」(頁数未定)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井谷 信彦 (ITANI NOBUHIKO)
京都大学・大学院教育学研究科・JSPS 助教
研究者番号：10508427

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：